

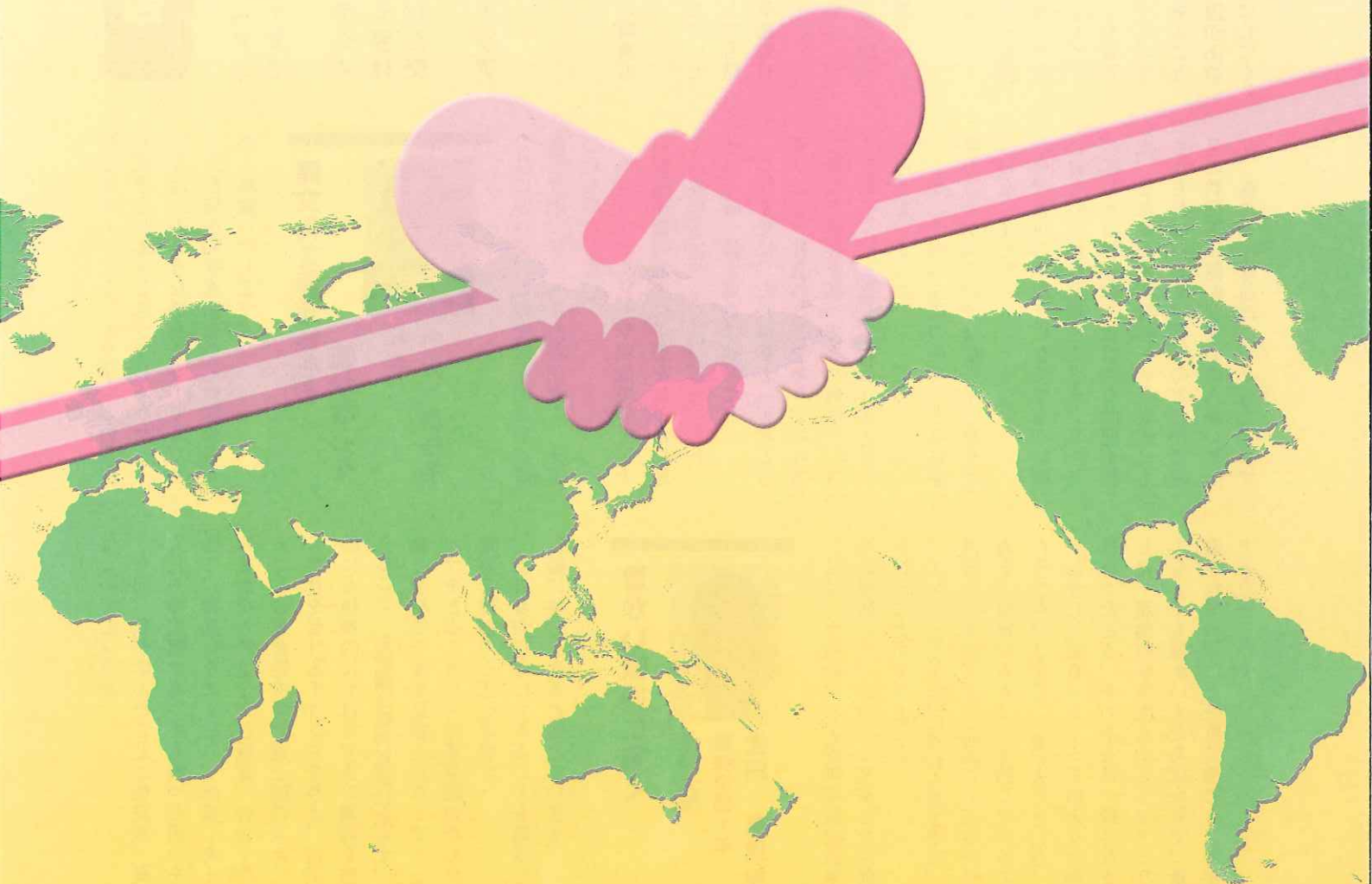
ピース・ウイング長崎 会報

へんりわ

111号

■財団法人長崎平和推進協会 〒852-8117 長崎市平野町7番8号 ■電話(095)844-9922 FAX(095)814-0056
<http://www.peace-wing-n.or.jp>

- アジア青年平和交流事業報告
- 追悼平和祈念館「海外原爆展」
- 61年目の長崎からネバダへ
- 平和宣言
- 第3回核兵器廃絶一地球市民集会ナガサキ
- 原爆遺跡・碑巡り



アジア青年平和交流事業報告

当協会設立20周年事業として始まり、4回目を迎える「アジア青年平和交流事業」では、8月5日(土)〜10日(木)までの6日間、初めてマレーシアを訪問しました。

マラヤ大学のナスルディン教授をはじめ、渡辺教授、ザイノール講師それにホストファミリーとして日本青年を温かく受け入れてくださった多くの方々のおかげで、たいへん充実した交流になりました。

今回、交流訪問を初体験した日本人青年5名に、マレーシアを訪れて平和について感じたことを綴ってもらいました。

訪問前・後の心境の変化と感想



長崎大学
経済学部4年
荒岩 六平

旅行前：今回、アジア青年平和交流事業でマレーシアに行くことが決まり、事前研修で様々なことを学びました。

第二次大戦中に日本が侵攻したことがある国だということで、老人世代に強い反日感情があるのではないかという不安を持っていました。

旅行中：マレーシアに着いてからすぐに、ホストファミリーや学校の子どもの熱い歓迎を受けました。

初めて見る日本人に興味津々の子ども達。ホストファミリーはとても穏やかなムードと最高のもてなしで私たち

を歓迎してくれ、反日感情など微塵も感じられませんでした。

学生たちとの交流では想像していたよりもずっと楽しく、学生はとても積極的で次々と質問が出るし、英語も日本語もたいへん上手でした。

平和に対する意識は非常に高く、マレーシアが独立して以来安定した政治を保っていることを皆とても誇りにしていました。

日本と違い他民族が生活する中で、お互いを尊重し対立することなく発展している様子は、今後世界が進むべき道を示しているようにさえ思えました。

旅行後：このような交流はとても重要だということに気付きました。イスラム教は平和を重んじる宗教であること、を今回初めて学びましたし、誰があのように友好的で、とても親切にしてく

れたホストファミリーや学生のいる国と戦争をしようと思うでしょうか。今回このような機会を与えてくださった長崎平和推進協会やその関係者に深く感謝いたします。

異文化を尊重しあう 豊かな心を



社会人
中山 加奈子

私にとって、この交流事業は事前研修を含め、たいへん内容が濃く、充実したものでした。

ホストファミリーや現地の学生、その他関係者の方々に予想をはるかに超える歓迎を受け、人々の温かさに触れ、その一瞬一瞬が感動の連続でした。

これまでは、ただ漠然と「平和とは戦争がない社会のことであり、繰り返し多大な犠牲を払ってきた戦争や、各地で続いている紛争を終わらせること」と考えていました。

しかし今回の交流の中で、さらに必要なことがあるのではないかと思うようになりました。

今、戦争の状況下になくても、実際に戦後61年経った現在でさえ、私たちの国日本は周辺国と政治的な問題を抱え、またミサイル発射という脅威にもさらされています。世界のどこかで紛争の状況下に置かれている人がいる限り、真の平和は訪れないと言えるので

はないでしょうか。

今回、私が学んだことは他民族・異文化や多宗教であっても偏った思いを捨て、お互いをよく知り、尊重しあえる豊かな人間性を育む教育、社会を作ることの重要性です。途上国の人々にも教育を受けるチャンスを与え、経済的にも精神的にも自立できる環境を整えること。先進国は私利私欲に走らず、驕りを捨て今後を見据えたりリーダーシップをとることが、世界平和のための重要な役割だと思います。

私自身が自分でできることを模索し行動に移して生きたいと思います。

温かい歓迎に驚く



長崎大学
環境学部1年
宮田 真里絵

私は、今回のアジア青年平和交流事業に参加して、たいへん充実した活動を行うことができました。

マレーシアを実際に訪れる前までは、過去に日本がアジア諸国にしてきた行為を、現地の人々はどう感じているのだろうかという多少の不安がありました。

しかし、初日マレーシアの人々と触れ合ったとき、その不安は一掃されました。現地の小学生もホストファミリーもとても温かい人たちがばかりで、歓迎されていることを肌で感じる事ができたからです。

あまりの歓迎振りに感激を覚えるほどでした。踊りや言葉など自分たちの国の文化に誇りを持っていて、その素晴らしさを他の国の人たちにも分かってもらいたいという気持ちが伝わってきました。

お互いの文化を知り合い理解しあうことで相互理解が深まり、平和に繋がるということを実感することができました。

いくつかの国からの植民地の歴史など、過去を嘆くばかりでなく平和な未来を国民全員で創っていかうという強い思いも感じることができました。また、マレーシア各地の日本人墓地が海外の地で祭られているという事実に驚き、感謝の気持ちがわいてくるようでもあり日本にいるときはまた違う気持ちになりました。

これからも、今回関わった方々と連絡を取り合っていくことで日本とマレーシアのみならず、アジア、世界各国との平和を築くために何が必要かと考え、さらに多くの人と話し合っていくたいと思っています。



お別れ会においては互いの国の歌を披露

そして、日本のアニメや映画が人気で多くの企業が進出し、デパートなどにはお祈りをするための部屋があり、マラヤ大学はとても大きな書き切れない程の発見があった。最高に楽しかったのは、4日目のマラヤ大学でのお別れ会であった。学生はとても勉強熱心で人の話をよく聞く。日本には私も含めなかなかない気がする。話には身を乗り出して耳を傾け、質問もたくさんしてくれた。一緒に踊り歌い食事をして、連絡先の交換をしたりとたいへん仲良くなれた。しかし、不安に思うこともあった。

勉強熱心なマラヤ大学生



長崎大学
環境学部1年
向 香織

マレーシアに行くことになってから、これまで「平和」についてほとんど学んだことのなかった私にとっては勉強に追われる毎日となった。

資料で、マレーシアは2020年までに先進国入りを国策にするということを読んでいたが、これほど近代化が進んでいるとは思わなかった。

滞在中、触れ合う人たちの友好的で優しいこと、反日感情への私の心配は杞憂に過ぎなかった。

た。それはマレーシアの急成長のひずみである。環境は急激に悪化し、人々の生活が短期間に変化しすぎる。

お世話になったホストファミリーの子どもが、ゲームに没頭して母親の言葉を無視するのを見た時、こういうことも先進国になることの弊害なのかも知れないと心配になった。

しかし、私は「平和」「原爆」「マレーシア」に、今回初めて接した事で、これからも積極的に情報を集め、考え交流していきたいと思う。

平成18年度アジア青年平和 交流事業に参加して思うこと



社会人
赤司 咲子

私はアジア青年平和交流事業の一員として、平成18年8月5日から平成18年8月10日の日程でマレーシアを訪問して参りました。人生の宝となる貴重な体験をさせていただいた長崎平和推進協会に心より御礼申し上げます。

この事業は今年で四回目を迎えたそうです。過去三年間は韓国を訪問し、今年新たに平和を愛する国マレーシアが訪問先として選ばれました。訪問中にはマレーシア人との交流が多種多様な形で見事に企画されており、非常に充実した文化交流を行うことが出来ました。



交流を通してマレーシア人の思いやりの深さに感銘をうけました。イスラム教の教えと習慣の影響で、自己中心的になりがちな現在社会においても自己の利益より他を重んじることを日々実行している人々だと感じました。

多民族の国において民族間の調和と平和を保つ秘訣を尋ねると、皆「to know each other(互いを知ること)」と答えてくださいました。この姿勢こそ、平和を保つうえで必要なものだと感じました。

帰国後、私は以前より人に優しく接することができるようになりました。マレーシアでもらった沢山の優しさをより多くの人に還元し、日本とマレーシアの架け橋になればと思います。

そして、一人でも多くの若者がこの事業に参加し、長崎から発信する平和と友情の輪が世界中に広がることを心から期待しています。

【六十一年目の夏、ネバダ核実験場の近くで開催】

◆追悼平和祈念館「海外原爆展」◆

当協会が運営を委託されている国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館では、本年八月五日から八月二十七日まで、アメリカ合衆国ネバダ州ラスベガス市にある核実験博物館で、「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催しました。同館による海外原爆展は、昨年のシカゴに続き二回目のものです。

今回の原爆展は、核超大国である米国のネバダ核実験場から百数十キロメートルしか離れていないラスベガス市の、さらには「核実験博物館」での開催ということで、計画段階からマスクミほか各方面の大きな関心と反響を呼



開会式後、被爆体験を語る丸田氏

びました。その中で、双方の館が慎重な協議を重ねるとともに、各方面の識者の助言もいただきながら準備を進めました。また、ウイリアム・ジョンソン館長をはじめとする同博物館関係者、在サンフランシスコ総領事館の方々及び在ラスベガス名誉総領事など、多くの皆様のご理解とご協力、さらには具体的な支援を得て開催に至りました。

開会式は、八月五日の午後二時から行われ、ジョンソン館長の解説から始まりました。続いて、来賓のスピーチやメッセージ伝達があり、祈念館長からの挨拶と記念品の交換があった後、当協会継承部会員の丸田和男さんによる被爆体験講話が行なわれました。

長崎から被爆者が話しに来ることに ついて、当地での関心は大きく、開会前から丸田さんには報道関係数社の取材がありました。ちなみに、現地滞在中、日本のテレビネットワーク五局、日本の新聞社・通信社特派員三社、現地新聞二社、現地テレビ五局、米国通信社一社に及ぶ取材がありました。

丸田さんの被爆体験講話は、博物館の会場で三回、ラスベガス市郊外の小

学校で一回の計四回おこなわれました。

博物館における講話は、どの回も、百五十人定員のホールに立ち見客が出る状態でした。特に、開会式当日の講話については、別室にテレビ映像の継ぎまでされました。各回とも聴講者は熱心に聞き入り、講話の後は十数人から質問や意見・感想が出され、さらにはスタンディングオベーションで丸田さんを称えるなど、雰囲気や内容とも充実した講話となりました。小学校の講話でも、児童や教育関係者にくわえて保護者も参加した約二百五十人の聴衆に、深く感銘を与えた様子でした。

展示会場にも、約三週間の会期中、三千五百人を越す見学者が訪れました。私たちの滞在中、来場者は皆、真剣な眼差しで展示を見詰め、中には悲惨な被爆パネルの前で考えこむ様子も見られました。会場には、子どもづれの家族が多かったように思います。くわえて、かなり高齢の方々が目立ちました。その中に、第二次大戦の従軍経験者、ビキニ核実験の参加者、ネバダ核実験場の従事経験者等がおられました。どの方々も当地での原爆展を評価していたのが印象的でした。一方、夏休み中ということも影響したのか、大学生など若者層が少なかったことは、



フリーウェイからはるかネバダ核実験場を臨む

少々気になったところでは、

いずれにしても、今回の原爆展を見たり、被爆体験講話を聞いた人々は、ひとたび核兵器が都市の上空で炸裂したら、人間がどのような凄惨な状況に置かれるのかを実感し、自分なりに戦争や平和を考える契機にしていただけなことと確信しています。

ところで、原爆展の終了直後には、ネバダ核実験場で、臨界前核実験が実施されました。このことは、国際政治のし烈な現実を突きつけられる反面、なお現在も稼働中であり、核兵器開発の象徴ともいえるところで、ヒロシマ・ナガサキ原爆展を開催することができたことの意義を、噛み締めることとなりました。

61年目の長崎からネバダへ

継承部会 丸田 和男

あの長崎原爆の悲劇の日から61年目を迎えるというのに、新聞やテレビで「核」という字にお目にかからない日はないほど核を巡る情勢は複雑多様化かつ目まぐるしく変化しています。

今年3月、長崎追悼平和祈念館が、8月に米国のネバダ州の核実験場で近いラスベガスの核実験博物館で原爆展を計画していることが明らかにすると、11年前のスミソニアン航空宇宙博物館が企画した原爆展中止と重ね合わせて、「実現するかネバダ原爆展」「米国内の反発懸念」とマスコミも注目する中、「61年目の長崎の声」をアメリカ市民に伝えるという重い任務を背負って、8月3日旅立ちました。

ラスベガスに着いて、本番前の8月4日、核実験博物館の講演会場を下見に訪れました。両国国旗がきらびやかに立てられているのを見て、明日詰め掛けるであろうアメリカの人達とマスコミのカメラの前に立つ

自分の姿とが重なり、緊張感と不安感が胸をよぎりながらも「よしっやるぞ！」とファイトが湧いてきたのを覚えています。

8月5日、開会式。講話は午後2時からというのに午前中から開会式直前まで内外のマスコミの取材攻勢に振り回されてしまいました。

初日の講話は立見が出るほどの盛況で会場は熱気に包まれ、人々の関心の高さを感じました。

講話の最後は「長崎を核兵器による最後の被爆地に！これが長崎市民の切なる願いであり、全世界に対するメッセージです」と締めくくると全員が「スタンディングオベーション」で称えてくれました。私はこの時、大きな手ごたえを感じたのでした。

その後の質疑応答の中では、中年の男性が「原爆投下についてアメリカ政府は謝罪したことはないが、私は個人的に謝りたい」と発言したのにはこちらも感動を覚えました。

長崎の被爆者とはいえ、遠く日本

からやってきた無名の一市民が、アメリカ市民とこの種のやり取りをするということは極めて異例のことと言えましょう。講話が終わってから多くの人から握手・サイン攻めにあったのには少々面食らったほどでした。

6日、9日の講話も同様で皆熱心に聴いてくれて質疑応答も活発でした。

7日にはラスベガスから約120キロ離れたネバダ核実験場を臨む所まで案内してもらい、荒涼とした広大な砂漠地帯を眺めた時には、幸運にも生き残って61年を経た今、ネバダの核実験場近くに立っている自分の姿に言い表しようのない深い感慨を覚えたのでした。

アメリカの安全を守るために核兵器は選択肢の一つとして必要であるという考えが大方のアメリカ国民の根底にあることは周知の事実ですが、少なくとも4回の講話を聴いてくれた800余名のアメリカ市民には、「61年目の長崎からの声」は確実に届いたものと信じます。

8月10日、ロサンゼルス空港。私は自分なりに使命を果たしたという安堵感と心地よい疲労感に包まれながら、英国機テロ未遂事件で混雑するアメリカを後にしたのでした。



ラスベガス郊外のコザイン小学校で体験を語る



コザイン小学校において子ども達の質問にこたえる

サインや握手、記念写真など講話後ラスベガス市民に囲まれる（核実験博物館）



平和宣言

Peace Declaration

長崎市長 伊藤一長

「人間は、いったい何をしているのか」

被爆から61年目を迎えた今、ここ長崎では怒りといらだちの声が渦巻いています。

1945年8月9日11時2分、長崎は一発の原子爆弾で壊滅し、一瞬にして、7万4千人の人々が亡くなり、7万5千人が傷つきました。人々は、強烈な熱線に焼かれ、凄まじい爆風で吹き飛ばされ、恐るべき放射線を身体に浴び、現在も多くの被爆者が後障害に苦しんでいます。生活や夢を奪われた方々の無念の叫びを、忘れることはできません。

しかし、未だに世界には、人類を滅亡させる約3万発もの核兵器が存在しています。

10年前、国際司法裁判所は、核兵器による威嚇と使用は一般的に国際法に違反するとし、国際社会に核廃絶の努力を強く促しました。

6年前、国連において、核保有国は核の拡散を防ぐだけでなく、核兵器そのものの廃絶を明確に約束しました。

核兵器は、無差別に多数の人間を殺りくする兵器であり、その廃絶は人間が絶対に実現すべき課題です。

昨年、189か国が加盟する核不拡散条約の再検討会議が、成果もなく閉幕し、その後も進展はありません。

核保有国は、核軍縮に真摯に取り組もうとせず、中でも米国は、インドの核兵器開発を黙認して、原子力技術の協力体制を築きつつあります。一方で、核兵器保有を宣言した北朝鮮は、我が国をはじめ世界の平和と安全を脅かしています。また、すでに保有しているパキスタンや、事実上の保有国と言われているイスラエルや、イランの核開発疑惑など、世界の核不拡散体制は崩壊の危機に直面しています。

核兵器の威力に頼ろうとする国々は、今こそ、被爆者をはじめ、平和を願う人々の声に謙虚に耳を傾け、核兵器の全廃に向けて、核軍縮と核不拡散に誠実に取り組むべきです。

また、核兵器は科学者の協力なしには開発できません。科学者は、自分の国のためだけでなく、人類全体の運命と自らの責任を自覚して、核兵器の開発を拒むべきです。

繰り返して日本政府に訴えます。被爆国の政府として、再び悲惨な戦争が起こることのないよう、歴史の反省のうえにたって、憲法の平和理念を守り、非核三原則の法制化と北東アジアの非核兵器地帯化に取り組んでください。さらに、高齢化が進む国内外の被爆者の援護の充実を求めます。

61年もの間、被爆者は自らの悲惨な体験を語り伝えてきました。ケロイドが残る皮膚をあえて隠すことなく、思い出したくない悲惨な体験を語り続ける被爆者の姿は、平和を求める取り組みの原点です。その声は世界に広がり、長崎を最後の被爆地にしようとする活動は、人々の深い共感を呼んでいます。

本年10月、第3回「核兵器廃絶—地球市民集会ナガサキ」が開催されます。過去と未来をつなぐ平和の担い手として、世代と国境を超えて、共に語り合おうではありませんか。しっかりと手を結び、さらに力強い核兵器廃絶と平和のネットワークを、ここ長崎から世界に広げていきましょう。

被爆者の願いを受け継ぐ人々の共感と連帯が、より大きな力となり、必ずや核兵器のない平和な世界を実現させるものと確信しています。

最後に、無念の思いを抱いて亡くなられた方々の御霊の平安を祈り、この2006年を再出発の年とすることを決意し、恒久平和の実現に力を尽くすことを宣言します。

2006年（平成18年）8月9日

国際シンポジウム

国際シンポジウム「核なき明日へ61年目のナガサキから」が、本協会と朝日新聞社、長崎市との共催で7月29日(土)ブリックホール国際会議場において開かれ、約400人の市民が集まり、核兵器廃絶や未来の平和について考え合いました。

第1部では、芥川賞作家で長崎市出身の林京子さんが、長崎の高校生と語り合い、「長崎の若者の活動を見ていると被爆者がいなくなっても平和への思いは受け継がれていると感じる」と延べ、平和活動を続けている若者に勇気を与えました。

第2部では、「核拡散の危機と日本」をテーマに、米戦略国際問題研究所日本部長マイケル・グリーンさん、前外務審議官の田中均さん、東京大学教授の藤原帰一さん、元長崎大学長の土山秀夫さんらをパネリストに、コーディネーターを若宮啓文・朝日新聞論説主幹が務め、北朝鮮のミサイル発射問題を軸とした、核不拡散に向けた政策のあり方や北東アジアの非核地帯化について熱い論議を繰り広げました。

文書問題

平成18年1月20日の継承部会臨時総会で配布した「より良い被爆体験講話を行うために」文書の取扱いについて

同文書につきましては、配布後、各方面から多くの反響があり、会員の皆様にも大変ご心配をお掛け致しました。心よりお詫び申し上げます。

この取扱いにつきましては、6月24日の継承部会総会において、論議を行い、文書の撤回の方針が集約されました。これを受け、7月20日に理事会が開催され「文書の撤回」について承認されました。併せて、「協会の設立理念・趣旨を踏まえた不偏不党という協会のスタンスは変わるものではなく、したがって、継承部会の体験講話において、一定の配慮をお願いする従前からの方針は変わらない。また、新たな文書の出し直しについては、今後の継承部会の論議を尊重し、その際には、継承部会のみならず、事業推進委員会・運営会議及び事務局が一体となって取り組む」ことが承認されました。

第3回「核兵器廃絶—地球市民集会ナガサキ」

いよいよ3回目となる「核兵器廃絶—地球市民集会ナガサキ」が10月21日(土)–23日(月)に開催されます。被爆61周年目の今年を再出発の年として、核兵器廃絶へ向けた具体的な手段を世界各国の方々と共に考えてはみませんか。

21日(土)	9:30	分科会①(長崎ブリックホール国際会議場)
	14:00	開会集会(長崎ブリックホール大ホール)
22日(日)	9:30	分科会②・③・④(原爆資料館・平和会館・追悼平和祈念館)
	14:00	分科会③・⑤(原爆資料館・平和会館・追悼平和祈念館)
23日(月)	13:30	閉会集会(平和会館ホール)
	16:30	ピースウォーク(平和会館～原爆落下中心地)

分科会①「非核宣言自治体フォーラム」	テーマ:非核宣言自治体活動の活性化と国際的連携
分科会②「非核兵器地帯と核の傘」	テーマ:非核兵器地帯の意義と北東アジアにおける挑戦
分科会③「核兵器廃絶と多国間交渉」	テーマ:核兵器廃絶へ向けた世界の動きと日本の役割
分科会④「平和教育フォーラム」	テーマ:平和教育推進に向けた取り組みと課題
分科会⑤「青少年フォーラム」	テーマ:核兵器廃絶に向けた若者のアプローチ
分科会⑥「被爆者フォーラム」	テーマ:核兵器廃絶へ向けた被爆者運動の今後と被爆体験の継承

問合わせは、核兵器廃絶地球市民長崎集会実行委員会までご連絡ください。

電話:842-9513 FAX:844-1954 ホームページ<http://www3.ocn.ne.jp/~gca.naga/>

国連が創設された10月24日から一週間で国連軍縮週間と定められています。本協会は今年も「市民のつどい」として長崎市と共催で次のような行事を行います。

野外イベント

日時 10月28日(土) 午前10時から午後1時まで

場所 原爆資料館玄関下の階段広場
催し 戦時食(たんこ汁)・環境にやさしい紙風船・キャンドル作成・折り鶴・わた菓子などの各コーナーを設けます。

屋内イベント

映画上映

「NAGASAKI・1945 アンゼラスの鐘」

被爆直後の原子野で、粗末な器具とわずかな医薬品を前に、被爆者の救護に苦悩する被爆医師で、本協会の初代理事長である故・秋月辰二郎先生の活躍を描いたアニメ映画を上映します。入場は無料です。(先着100人)

日時 10月28日(土)
開場 午後0時
開演 午後0時30分
場所 長崎原爆資料館ホール
 問い合わせ
 (財)長崎平和推進協会

☎095-844-9922

「地球市民集会ナガサキ」における本協会の自主企画事業

アジア青年平和交流事業報告会

今年で4年目となった「アジア青年平和交流事業」で、8月に日本人青年5名がマレーシアを訪問し、現地青年と交流の場を持ちました。今回は、マレーシアの青年2名を招き、日本人青年と報告会を開きます。会員皆様のご参加をお待ちいたします。

開催日時 平成18年10月21日(土) 午前10時～同11時15分
開催場所 追悼平和祈念館(原爆資料館となり) 地下2階 交流ラウンジ
パネラー 日本人青年5名、マレーシア青年2名

平和案内人による、碑巡りと未来へのメッセージ

- 平和案内人による碑めぐり
 平和案内人(ボランティアガイド)とともに、平和公園周辺の被爆建造物等をめぐります。被爆の惨状を知り、平和の尊さについて一緒に考えてみませんか。
 ・日時＝平成18年10月23日(月) 午前9時30分～
 ・集合日時・場所＝当日午前9時20分、長崎原爆資料館正面入口インフォメーションそば「平和案内人カウンター」
 ・参加費＝無料
 ・申し込み・問い合わせ先＝(財)長崎平和推進協会(電話095-844-9922)
- 戦時の暮らし体験と未来へのメッセージ
 平和案内人が過去の事実にあふれ、平和への想いをご紹介します。皆様からのメッセージも書き残していただきます。長崎から核兵器のない未来に向けたメッセージと一緒に発信しませんか。
 ・展示日時 平成18年10月21日(土)～23日(月) ・展示場所 長崎原爆資料館スロップ下

「原爆遺跡・碑巡り」

主催 (財)長崎平和推進協会
 TEL 844-9922

場所 爆心地から二三キロメートルの三菱兵器トンネル工場跡から、被爆当日の救援列車到着地(清水町・照圓寺)付近迄を辿ります。

実施日 平成18年11月26日(日)

時間 小雨決行 午前10時～12時まで

集合場所 赤迫町電停東側(エトウ動物病院前付近) 9時50分集合

参加費 無料(参加者に巡回地付近の資料を配付します。)

案内 長崎平和推進協会継承部会・碑巡り班

ご寄附ありがとうございます

- 匿名(五千円)
- 石田 スマ子(三千円)
- 長崎ピースラリー実行委員会(十万円)

(敬称略)

平和推進協会会員数

維持助	1、313名
賛助	159名
臨時	8名
学生	7名
合計	1、487名

平成18年9月末現在